

現代社会における仏教の存在価値

佐々木 閑

1. 「欲求を追い求める人生」か「欲求を追い求めない人生か」

1. 世間とは「刷り込み共同体」。世間における幸福とは「欲求の充足、夢の実現」。これは私たちが生物として持っている本能的思考傾向。

2. 「虹の向こうの夢を追い求める気持ち」が人類を発展させ、そして多くの人を苦しめてきた。

2. 欲求を追い求める人生と追い求めない人生には、優劣も善悪もない。

どちらの人生を選ぶかは、人それぞれの状況が選択の基準になる。

ただし、欲求を追い求める人生には、「快楽」と「苦」とがつきまとう。

3. 「欲求を追い求める人生」を止めたとき、なにが得られるのか。

心の平安。欲求に追い立てられ、「よりよいものを手に入れねばならない」という強迫観念からの開放。

4. 「欲求を追い求める人生」を止めるにはどうしたらよいのか。

追い求めているのは自分自身。したがって自分自身の中の「追い求める」心を生み出す原因を滅すれば、「追い求める人生」はとまる。

「私はなにかを手に入れるための人生ではなく、手に入れようと思わない人になるための人生を歩みたい。それによって生きる苦しみから救われたい」と願う人のために仏教はある。

追い求める生き方の基盤は、「私」と「私のもの」が変わらず存在しているという思い。それを捨てることが、安樂をもたらす。

「欲望（執着）」は生命が持つ根源的本能であるから、それを放棄するためには心の内部でのトレーニングが必要。その欲望の放棄を実現するためのトレーニングが修行。日常の暮らしの中でもトレーニングは十分可能。

5. 「私」中心の世界観を捨てるために

私中心の見方が苦しみを生む。

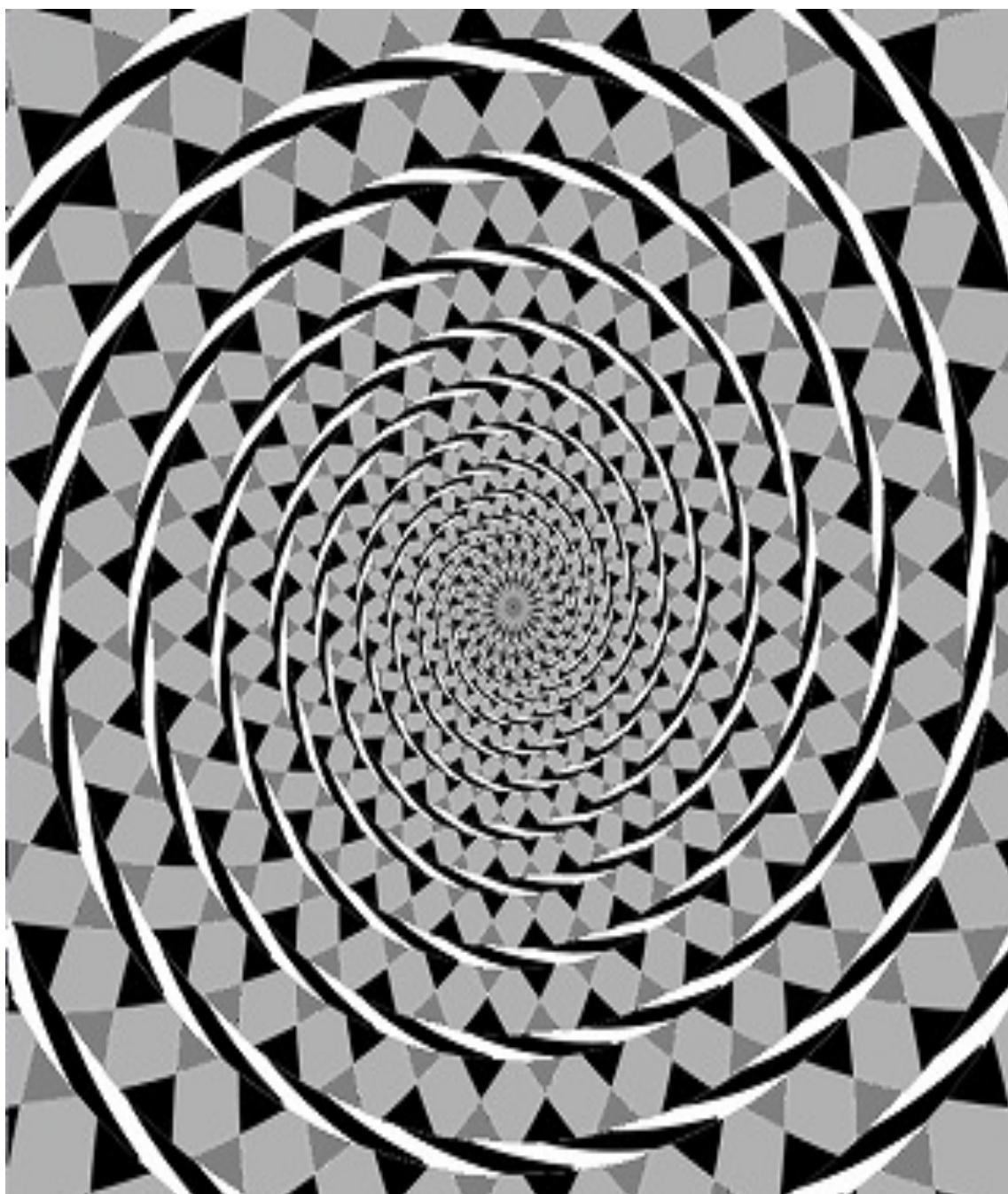
- ・「私が世界の中心にある」という慢心
- ・「私がいなければこの世は成り立たない」という過信
- ・「いつまでも今の私を維持したい」という渴愛

「諸行無常」（諸行は常ではない）

「諸法無我」（世の中に「私」という絶対存在はない）

「涅槃寂靜」（究極の安樂は、欲望の充足ではなく、欲望の消滅である）

「一切皆苦」（生きることは苦しみである）



6. 誰もがあたりまえと思っている価値観から抜け出すことができるか。

1. 幸せとはなにか。幸せの顔をした不幸もある。
2. 宗教を信じるとはなにか。「私は無宗教」などという錯覚。
3. 自殺（自死）をどう考えるか。死者を差別する社会。
4. 葬儀をどうとらえるか。自分の葬儀は自分のためではない。
5. 人は間違った見方をする、という事実を我が身のこととして考えているか。

7. AI 時代の仏教

AI は人の自尊心、存在意義を奪う。「私」という拠り所をなくした AI 時代の人たちを、苦しみから救うことができるのは仏教の「諸法無我」の教え。